

論文審査の結果の要旨

氏名：山 形 泰 之

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：カント哲学における宗教思想の展開

審査委員：（主査） 教授 石 浜 弘 道

（副査） 教授 眞 邊 一 近

（副査） 日本大学名誉教授 小 坂 国 継

1、 本論文の目的

本論文は、I. カント（Immanuel Kant, 1724—1804）の主要著作を通して、彼の批判期から晩年にいたるまでの宗教思想を抽出することを目的としている。その中で特に晩年における彼の宗教思想がそれまでの著作とどのように違っているかを明らかにすることで、カント宗教思想の新たな解釈を試みている。

2、 本論文の構成（各章の見出しのみ記載）

はじめに

第1章 カントと神の存在証明の問題

第2章 美と叡知界

第3章 目的論的判断力と道徳的目的論

第4章 道徳的目的論と道徳神学

第5章 『宗教論』と人間の宗教的側面

第6章 『実践理性批判』と『オプス・ポストゥムム』の思想的異同

第7章 『宗教論』と『オプス・ポストゥムム』の思想的関連

結 論 Mitwirkung の神と純粹宗教信仰について

文献表

3、 本論文の概要

第1章では『純粹理性批判』に於いて消極的に導出された自由の議論から、それを引き継ぐ『実践理性批判』による積極的な自由への展開を確認し、カントによる両批判の相互関係に基づく神へのアプローチを検証している。人間をア priori に道徳的存在とする議論は、単に「理性の事実」のみに依拠する故に、他なる視点からの論証の必要性が考えられるものの、カントの方法は、中世から近代にかけて行われた思弁による独断的な神の存在証明を批判的に捉え、人間がどのようにして神に接近できるのかという問題の新たな道筋を構築したとする。

第2章では『純粹理性批判』と『実践理性批判』の関係のみで、神へのアプローチが図れるとするならば、宗教思想としての『判断力批判』の位置づけが見えなくなるだろう。本章では、『判断力批判』もカント宗教思想の一端を成すことを示しながら、三批判書の連関を検証する。とりわけ人間が如何にして道徳的存在であり得るのかという問題に対して、その答えの一つをカントによる美感的判断力の議論に求めているが、その議論を通じて、単に「理性の事実」に依拠した道徳的存在としての人間の論証ではなく、美を媒介にすることによって人間と叡知的なものとの関わりを考察している。

第3章では、第2章に於ける議論を踏まえながら、『判断力批判』のもう一つの主題である目的論的判断力の考察を行う。美感的判断力の議論は、美という人間の快の感情に関わる性質上、内的・主観的なものと考えられる。故にその議論が客観性を持つか否かという点で弱点が見られる。目的論的判断力の議論は、両判断力の原理となる合目的性を、人間の外界に当てはめたときにどのような諸相を見せるのが課題となる。そこから現れてくる有機体的諸相は、外界における人間を含めた様々な動植物の連関、さらには人間の本来の目的を探る議論を惹起し、最終的に人間の目的が道徳的存在であるとする。

第4章では『判断力批判』の議論を検証していく中で、人間が道徳的存在であることが補強されていく。

『判断力批判』に於いても道徳的人間の存在から、最高善の議論を通じて神へと至るといふ論理構造は『実践理性批判』と同様に維持されている。仮に『判断力批判』と『実践理性批判』の最高善に纏わる結論が同じであるとするならば、三批判書が相互に不足する点を補足しながら、神へのアプローチを図っていると考え本論の立ち位置が弱まる。そこで『実践理性批判』と『判断力批判』に於ける最高善思想の異同を「方法論」から探り、どの部分で『判断力批判』の議論が、『実践理性批判』の内実を超えているのかを検証する。結論として、『実践理性批判』の最高善は個々人を前提とし、『判断力批判』で論じられている最高善は類としての人間を対象としているということである。類として道徳的存在であるのかという議論は、人間が道徳を通じて神へと接近し得ることをより確実なものとする。

第5章では『宗教論』とりわけその第一編、第二編を中心に、根元悪思想とその克服を検証している。『宗教論』に於ける根元悪思想の導入は、自律的存在とされる人間の立ち位置を揺るがせにするものである。そこでは、人間の根源的な弱さが論じられ、神との関わりなくしては、人間が成長・発展していくことができない。象徴的に表れるイエス像は、カントの宗教思想がキリスト教思想との融合を図るかに見せつつも、カントが論じる神やイエスとの関わりは、単に他律を示すものではなく、人間に内在する本来的な善いもの（原像）を如何に引き出していくのかに焦点が当てられている。自律した人間像は弱まるものの、否定されるものではないという独特なカント人間観の立ち位置がみられるとする。

第6章では先に見た『宗教論』の議論は一部のカント研究者や宗教哲学者から、カントの自律的な思想体系からの異端として見られている。確かに、三批判書と『宗教論』のみを比較したのでは、そのような解釈も為されうるが、『宗教論』以降のいわゆる晩年期のカントの宗教思想を考察してみるならば、「理性宗教」の一言では論じきれないカント宗教思想の発展があるとする。宗教思想的視点から『遺稿』を扱う上で、重要な論点として定言命法の議論を挙げる。三批判書では、定言命法は、『実践理性批判』に於いて主に論じられているが、そこでの議論と『遺稿』での議論が質を同じくするものなのか否かということ考察する。『実践理性批判』での定言命法の議論は、最高善導出の関わりの中で論じられるものであり、その神の出現は補助的なものに過ぎなかった。一方『遺稿』では、義務を課す神と、課される神の関係が論じられ、その議論は完全たる神と不完全たる人間という内容に及ぶのである。直接的な神の顕現は、三批判書における補助的な神の出現を超え、人間と神の直接的な関わりを想起させるものとする。

第7章では、第6章に於いて論じられた『遺稿』の神は、人間と直接的に関係を持つ神である。『遺稿』ではその神の姿を「外なる神、内なる神、周りの神」と論じている。「周りの神」とは、外なる神と内なる神を包摂する関係の神ということができる。人間の本来的に善いものを、神との関わりの中で見出していく、そこには、単に神の他律ではなく、なおかつ完全なる人間の自律でもない、人間と神の自律・他律の関係が見出されていく、という指摘に論者の独自の視点が明確に示されている。さらに『宗教論』第三編では、『遺稿』で論じられている理念的な神の姿が具体的な姿を以って論じられている。人間は、Mitwirkung（共働）と称される神との関係に於いて自らの発展、ならびに社会の発展を希望することができるとする。

結論では、カント晩年の宗教思想は、Mitwirkung（共働）の神を議論の中心に置きながら、単に「理性宗教」の枠組みに収斂されることのない、また既成の宗教思想とは一線を画した人間と神の関係であることを再確認している。

4、 本論文の問題点

第一に、カントの宗教思想に関する内在的な議論が先行し、当時のキリスト教思想（ピエティズムやキリスト教正統主義など）との比較や関係があまり論及されていない。この点はカントが宗教の問題を正面から取り上げた書物『宗教論』に関する本論文での取り扱いが1章のみにすぎない点でも明らかである。この書物が問題とした当時のキリスト教諸宗派に関する叙述とカントの宗教思想との比較考察が、カントの宗教思想の立ち位置を明確にする場合には、一層必要と思われる。

第二に、カントには宗教を扱った前批判期の作品、および晩年の『学部の争い』『宗教哲学講義』など、彼の宗教思想全体を論じるには重要な文献があり、これらをも研究書と併せてより詳しく考察することによって、論者が主張しているカント宗教思想の新たな視点がより説得力を持つと思われる。

5、 本論文の意義と成果

カントの宗教思想を彼の三批判書から解明することは従来から多くのカント研究者によってなされてきたことであり、そこから彼の宗教は「理性宗教」であるという解釈が主流である。晩年のカントのいくつかの宗教に関する書物もその線で解釈されてきた。しかしこれらの書物には「理性宗教」の枠には収まらない部分がある。そしてそれがカント宗教思想についてのこれまでの解釈とは異なってみる視点を示している。このことはカントの宗教思想を全体にわたって理解する上でも不可欠な点であり、本論文で論者は、従来素通りされがちなこの点に注目し議論を進めている。

そこで本論文の第一の成果は、カントの宗教研究に際して従来の三批判書から神を解明するというだけでなく、論者はカント哲学の脇役とみなされてきた晩年の著作である『宗教論』、『オプス・ポストウム』を正面から取り上げることで、カント哲学における宗教の位置に再評価を迫り、晩年のカントの神観を新たに解釈したことである。その際テキストの一つである『オプス・ポストウム』は1000頁を超えるカントの未整理の遺稿集であり、その内容・文脈に混乱があり、また邦訳もなくきわめて難解である。よってそれを本格的に研究しようとする者が日本ではもちろん海外でもわずかである。そのような状況の中で、これを研究のメインに取り上げ、神に関する新たな解釈を、内外の研究文献と議論しつつ論証している。

第二の成果として、三批判書を中心としたカントの宗教に関する研究が「理性宗教」として自律的人間が最高善を目指す際の、その補助者として神を位置づける、つまり自律的人間の力不足を背後から補う者としての神であるのに対して、晩年の『宗教論』、『オプス・ポストウム』では「純粹宗教信仰」として不完全な人間という面が論者によって強調され、それがやがて神との相互関係により道徳的能力を内面より引き出し、さらに共同体建設に働く神と位置づける。よって、従来の神観が自律的人間の内面的な補助者(内なる神)としての側面であったのに対して、この人間観に他律的な側面をも加味しながら、単なる超越的な神でもなく内在的な神でもない相互関係にある神として捉えることで、人間と神との在り方をいっそう明確にしている。この「相互関係にある神」という解釈の根拠となるのが『宗教論』に使用されている *Mitwirkung* と『オプス・ポストウム』に使用されている *um mich* という言葉である。これらの解釈や指摘はこれまで国の内外で注目されなかったことであり、カント宗教研究に神についての新たな解釈が加わったものと考えている。

以上本論文には今後の課題も見受けられるが、カントの宗教研究において、これまであまり取り扱われなかった晩年の宗教的著作を掘り起こすことによって、カントの宗教思想に新たな視点を提示したことは、十分に評価できるものである。

よって本論文は、博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 29 年 1 月 31 日